

多くの人々に支えられ、私たちの今がある

木曾三川と治水

木曾三川とは、濃尾平野を流れる木曾川、揖斐川、長良川の総称です。全てが木曾川水系に含まれ、濃尾三川とも呼ばれています。かつて、この三本の川は、下流部で合流・分流を繰り返して、たびたび水害を起こしていたため、江戸時代以降何度となく改修が行われてきました。



木曾三川河口付近（桑名市提供）

有名なものは薩摩藩が行った宝暦治水と、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらによる木曾三川分流工事です。

江戸時代、幕府は1753（宝暦3）年に薩摩藩に御手伝普請という形で川普請工事を命じ、翌年薩摩藩は家老の平田靱負を総奉行に任命し、藩士を現地に派遣して工事にあたらせました（宝暦治水）。桑名市内にはそのときの薩摩藩士の墓があります。

また、1877（明治10）年には、明治政府によって招かれたオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケが治水工事に派遣されました。洪水対策・輪中堤防内の排水改良・舟運の改善を主な目的として、三川と周辺の地形を調査し、分流計画書を作成、1887（明治20）年に分流工事が着工されました。その結果、当時の最新技術に基づいた分流工事は著しい効果を挙げ、水害による死者、全壊家屋または流失家屋は劇的に少なくなりました。

学習のめあて

木曾三川とよばれる木曾川、揖斐川および長良川は、かつて、複雑に入り乱れていました。このため、大雨が降ると川から水があふれ出し、大きな被害が出ていました。そこで、江戸時代以降、川の流れを整える治水工事が、何度も行われてきました。中でも大きな第一歩といわれているのが薩摩藩による宝暦治水です。

当時の薩摩藩はお金のやりくりが苦しく、幕府からの命令といえども、大きな工事ができるような余裕などありませんでした。しかし、薩摩藩家老の平田靱負の「同じ日本に住む、困っている人を救おう」という声のもと、およそ千人の藩士が濃尾平野に向かいました。

水とのたたかいは難工事の連続でした。多くの人の命が失われ、また、巨額の費用がかかりました。多くの犠牲を払いながらも、工事は見事に完成し、そのできばえは幕府の役人も誉めたにたるほどでした。

薩摩藩士たちがふるさとから遠く離れた地で、命がけで行った治水工事は、当時の人々の命や財産を守っただけではなく、今を生きる私たちに大きな恵みを与えています。工事にあった人々の姿が、今も語り継がれている意味や理由について考えてみましょう。

考えてみよう

- 1 木曾三川の流域で、たびたび水害が起こっていたのは、どうしてでしょうか。
- 2 ふるさとから遠く離れた場所での工事に向かうとき、平田靱負はどのようなことを考えていたのでしょうか。
- 3 薩摩藩士による治水工事の様子を、当時の人々はどのような思いで見えていたのでしょうか。
- 4 平田靱負を祭った治水神社がつけられたり、今でも毎年、薩摩藩士の慰霊祭が行われたりしているのは、どうしてでしょうか。
- 5 明治時代に木曾三川の治水工事に携わったオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケの業績について、調べてみましょう。
- 6 たくさんの人たちの苦労や努力の上に、今の私たちの生活が成り立っていることについて考え、話し合みましょう。

☆ 第1部の『「ありがとう」って言えますか？（P56～59）』を活用し、毎日の生活を支えてくれている人々の気持ちについて考えてみましょう。

宝暦治水

昔、木曾三川に囲まれた地域は、大雨が降るたびに水害にあっていました。特に江戸時代の慶長から宝暦にかけては、毎年川の水があふれ出し、流域に住む人々は苦しめられてきました。

これに対して幕府は、この流域の治水工事を、遠く離れた薩摩藩に命じました。当時、幕府は、薩摩藩をたいへんおそれていました。そこで、薩摩藩の力を弱めるために、大きな負担となるこの工事を命じたのでした。

このころ、薩摩藩はお金のやりくりで大変苦しんでおり、この命令を引き受けることに反対する意見がわき起こりました。しかし、もし断れば、幕府に反抗したとみなされ、藩は取りつぶされることとなります。薩摩藩家老の平田鞞負は、苦しみ悩んだ末に、この工

事を引き受けることを決断しました。その時、鞞負は家臣たちに「同じ日本に住む、困っている人を救おう」と語り、同意を得たのでした。

薩摩藩は平田鞞負を総奉行に任命し、およそ千人の藩士を木曾三川流域に送って工事に取りかかりました。水とのたたかいは難工事の連続でした。そのうえ度重なる洪

水のために工事費はふくれあがり、多くの犠牲者が出ることになりました。

しかし、様々な苦勞の末、1755（宝暦5）年5月に工事が完成しました。工事中は、さまざまな嫌がらせをしていた幕府の役人も、工事が終了したときには、「日本中のどこを探しても、この工事ほど素晴らしいものはないだろう」と誉めたたえたのでした。

平田鞞負は、工事における40万両の費用と多くの犠牲を出した全責任を負って割腹し、

52歳でこの世を去りました。幕府の命令とはいえ、ふるさとから遠く離れた地を水害から救った薩摩藩士たちの血と汗と涙の結晶は、この後、流域の人々に語り継がれています。

1938（昭和13）年には、平田鞞負を祭った治水神社（岐阜県海津市）が建てられました。この神社では、毎年4月25日と10月25日に、薩摩藩士の慰霊祭が行われています。



治水神社



平田鞞負の像（海蔵寺提供）



当時の木曾三川河口付近の地図（桑名市提供）
P130の写真と見比べてみましょう。



宝暦治水工事の様子（常音寺提供）